

〔学術資料〕

台湾原住民と動員

— 『特設警備部隊第 513 大隊台湾第 13887 部隊 留守名簿』 に関して —

Indigenous Peoples of Taiwan and Mobilization Related to ‘Absence name lists’ of unit 513

小野純子
Junko ONO

はじめに

1. 太平洋戦争末期の台湾島内動員—高砂特設警備部隊
2. 『特設警備部隊第 513 大隊 台湾第 13887 部隊 留守名簿』 とは
おわりに

要旨 台湾原住民（高砂族）の戦争動員については、「高砂義勇隊」のものがよく知られ、多く研究が行われているが、太平洋戦争末期の台湾島内での原住民動員については（漢民族同様）研究も資料もともに乏しい。本稿では、国立公文書館つくば分館所蔵の『留守名簿』で新たに存在が確認された島内動員の部隊群である高砂特設警備部隊に着目する。本稿では、『特設警備部隊第 513 大隊 台湾第 13887 部隊 留守名簿』を紹介し、防衛省防衛研究所所蔵の陸軍一般史料なども用いながら、内容を述べる。

キーワード：台湾、植民地、原住民、島内動員、高砂特設警備部隊

はじめに

筆者は、これまでの研究で、既存の台湾史、台湾軍事動員研究の対象となっていなかった期間と対象に関して言及し、そのなかで『留守名簿』と呼ばれる外征部隊所属者の現状と留守関係を明らかにした特定歴史公文書の分析を行ってきた¹。『留守名簿』調査を中心とした研究で、戦争末期に台湾原住民（高砂族）²が台湾島内で集中的に動員されている部隊（高砂特設警備部隊）が複数存在したことを明らかにした。本稿では、それらに焦点をあて、議論を進める。

これまで、台湾原住民の戦争動員は「高砂義勇隊」のものが著名で、それに対する研究も積極的

1 『留守名簿』に関する研究成果は、小野純子「日本統治末期、台湾の防衛体制と『留守名簿』：第 40 軍と嘉義を中心として」（名古屋大学博士論文、2019 年）、小野純子「大戦末期の台湾における「学徒」動員—特設警備第 511 大隊台湾第 13871 部隊の『留守名簿』の分析」（『軍事史学』第 55 号、2019 年）などを参考にされたい。

2 台湾の先住民は、日本植民地前期には「蕃族」と呼ばれていたが、それは侮蔑的であるとして植民地後期には「高砂族」と呼ばれるようになった。中華民国になってからは「山地同胞」と呼ばれていたが、当事者の要望により現代台湾では「原住民」と呼ばれるようになり、中華民国憲法でも「原住民」と規定されている。なお中国語では「先住民」の「先」に過去や亡の意味があり、当事者側に、過去の民=その土地の主としての権利を失った民、と理解されるので注意されたい。

に行われている³。その一方で、太平洋戦争末期の台湾島内での動員については原住民に限らず、漢民族においても同様に研究及び資料が乏しく、実態の解明には至っていない。しかし、筆者が行った調査の過程で、終戦間際の台湾島内では、「爆弾を抱えて戦車へ飛び込むための訓練」⁴を行っていた部隊（特設警備部隊）が多数存在していたことは明らかであり、彼らは大本営にとって戦争のための「コマ」としての役割があったと推測できる。このような部隊に関して調査、分析を進めることで既往の台湾史研究に有効な提言を行うための布石となり得る。その中で、高砂族の部隊に焦点をあてることで、漢族系台湾人動員や高砂義勇隊の研究では収まらない、日本植民地動員体制そして植民地・占領地防衛体制の解明を目指す。

本論においては、『特設警備部隊第513大隊 台湾第13887部隊 留守名簿』を調査、分析する。『留守名簿』の閲覧と申請には、1か月から1年以上の期間が必要であり、筆者は2016年より閲覧申請を行った。高砂特設警備部隊の名簿中で、第513大隊が最も早く閲覧可能となったため、本論の分析対象とする。

1. 太平洋戦争末期の台湾島内動員—高砂特設警備部隊

終戦間際の台湾では、第10方面軍(湾)の下に、第9師団(武)、第12師団(剣)、第50師団(蓬)、第66師団(敢)、第71師団(命)、独立混成第75旅団(興)、独立混成第76旅団(津)、独立混成第100旅団(盤石)、独立混成第102旅団(八幡)、独立混成第103旅団(破竹)、独立混成第112旅団(雷神)⁵の5個師団6個旅団の大規模部隊により防衛体制が築かれた。また、5個師団6個旅団のほかに、「特設警備部隊」と呼ばれる臨時的に編成される警備部隊が110個編成された⁶。

台湾における特設警備部隊に関して、1943年の特設警備第501大隊の編成を始め、終戦時の第10方面軍には大隊中隊66個、工兵隊12個、輜重隊15個、自動車隊5個、陸上勤務隊5個、水上勤務隊5個、患者輸送隊2個の110部隊⁷が存在していた。特に1945年になると、島内の各地で第二国民兵⁸による特設警備部隊への召集が多く見られた。110部隊のうち、半数は1945年3月以降に編成された。

1945年3月以降に編成された部隊の編成には一定の規則があった。それは「学校」、「地域」などの集団単位で編成されたことである。『留守名簿』の調査から、これらの部隊には、多数の「学徒」特設警備部隊が存在していたことが明らかになった。その『留守名簿』の調査の中で、学徒特

3 高砂義勇隊の研究に関しては、菊池一隆「台湾原住民から見るアジア・太平洋戦争—高砂義勇隊の実態と歴史的位置—」（『現代中国研究』第33号、2013年、特集：日中戦争における東アジア）の注釈1に詳しい。加えて菊池一隆『日本軍ゲリラ高砂義勇隊 台湾原住民の太平洋戦争』（平凡社、2018年）も参照されたい。

4 小野純子「嘉義農林学校学生の戦争体験」（『人間文化研究』28号、名古屋市立大学人間文化研究科、2017年）及び小野純子「嘉義農林学校学生の戦争体験2」（『人間文化研究』29号、名古屋市立大学人間文化研究科、2018年）で蔡清輝氏、林泰岳氏から証言を得た。

5 アジ歴ダロッサリー <http://www.jacar.go.jp/glossary/term/0100-0040-0090-0010-0010.html> 2016年7月16日 閲覧

6 戦史叢書によれば、「正規軍隊が配置されていない僻遠地域の防衛を強化して敵の擾乱企図に乗せられないため、あるいは予想される空襲激化に対する主要都市の混乱防止、警備」などのため、1943年6月（軍令陸甲第58号）、台湾に多数の特設警備大（中）隊の臨時編成が下令された

7 小野純子「大戦末期の台湾における「学徒」動員—特設警備第511大隊台湾第13871部隊の『留守名簿』の分析」（『軍事史学』第55巻第2号、軍事史学会、2019年）。

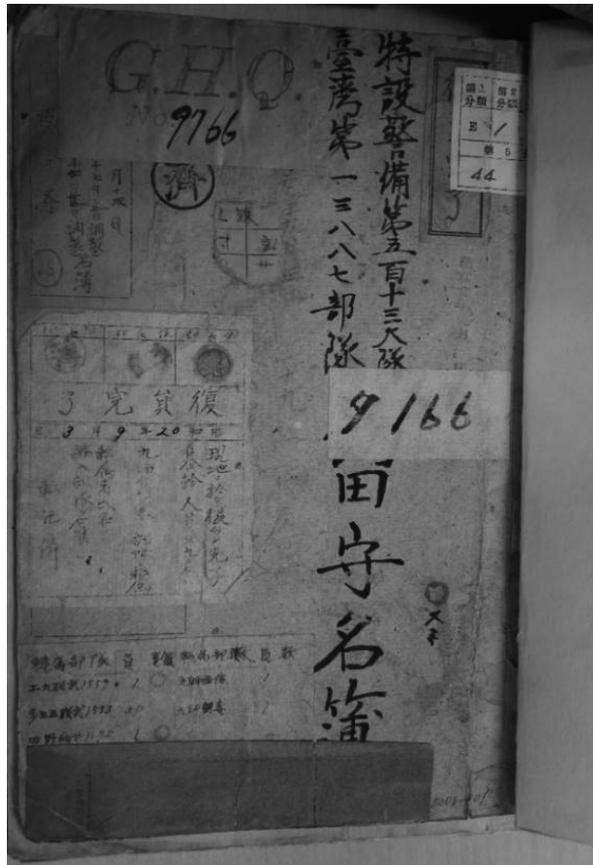
8 日本の兵役制度では、満17歳以上の男子（法律が改正され、20歳→19歳→17歳と引き下げられた。）は徴兵検査を受ける必要があった。徴兵検査後、合格者は現役として2年間の勤務をした後、予備役に移る。予備役は必要に応じて召集を受け、15年4か月後に第一国民兵役となる。合格者の中で、入営しなかった者は、補充兵役とされ、必要に応じて召集された。同様に後には第一国民兵役となる。第二国民兵役には、徴兵検査基準などでそれらに属さない満17歳以上45歳以下の男子が服していた。

設警備部隊と同様に、まとまった単位で特設警備部隊に動員された、原住民による「高砂特設警備部隊」の存在を確認している。次章では、まず『特設警備部隊第 513 大隊 台湾第 13887 部隊 留守名簿』を分析する。

2. 『特設警備部隊第 513 大隊 台湾第 13887 部隊 留守名簿』とは

これまでの研究の中で、先の章で示した特設警備部隊（学徒特設警備部隊）と同様に、まとまった単位で特設警備部隊に動員された「高砂特設警備部隊」の存在を確認している。筆者はこれまでの『留守名簿』調査の中で、戦争末期に高砂族が集中的に集められた部隊の名簿を発掘した。特設警備第 513 大隊(以下、第 513 大隊)の『特設警備部隊第 513 大隊 台湾第 13887 部隊 留守名簿』について以下に記述する。

【図 1 『特設警備部隊第 513 大隊 台湾第 13887 部隊 留守名簿』】



（『特設警備部隊第 513 大隊 台湾第 13887 部隊 留守名簿』、国立公文書館にて筆者撮影）

図1は、第513大隊の『留守名簿』の表紙である。筆者は、『留守名簿』全体の調査の中で、第513大隊の名簿を閲覧し、本籍や姓名などから本部隊が高砂族を中心に編成されたもの、高砂特設警備部隊ではないかと推察した。

『留守名簿』には、編入日、前所属、本籍（在留地）、留守担当者（住所、続柄氏名）、役種、氏名、生年月日などが記載されている。ここから、部隊の編成日、人数、規模、隊員の名前、出身地、役種などが判明し、部隊の凡その規模などが推定される。

第513大隊の『留守名簿』は、1945年7月15日に調整された。『留守名簿』記載の編入日から部隊の編成が1945年4月20日であったことが分かる。また、第513大隊に関しては、全員の編入日が1945年4月20日と記載されている⁹（図2）。そして、終戦後、1945年9月3日に復員完了つまり召集解除が完了している（図3）。

【図2『特設警備部隊第513大隊 台湾第13887部隊 留守名簿』¹⁰】

（『特設警備部隊第513大隊 台湾第13887部隊 留守名簿』、国立公文書館にて筆者撮影）

9 筆者がこれまでの調査してきた学徒の特設警備部隊では、1945年3月20日、4月20日、6月30日または7月5日など、何回かの召集を経て部隊を編成していることが多かった。

10 この名簿に載る名前はこの時期だけ使われた「改正名」であり、「民族名」や「漢族名」との対照表が公開されていない以上、当事者の日本植民地時代の住所を知っているか、当事者が「私の改正名は何であった」と名乗らない限り、誰であるかはわからない。歴史文書であり、大多数が故人となっていることも考慮し、伏せずにご利用。以下、図3～7同様。

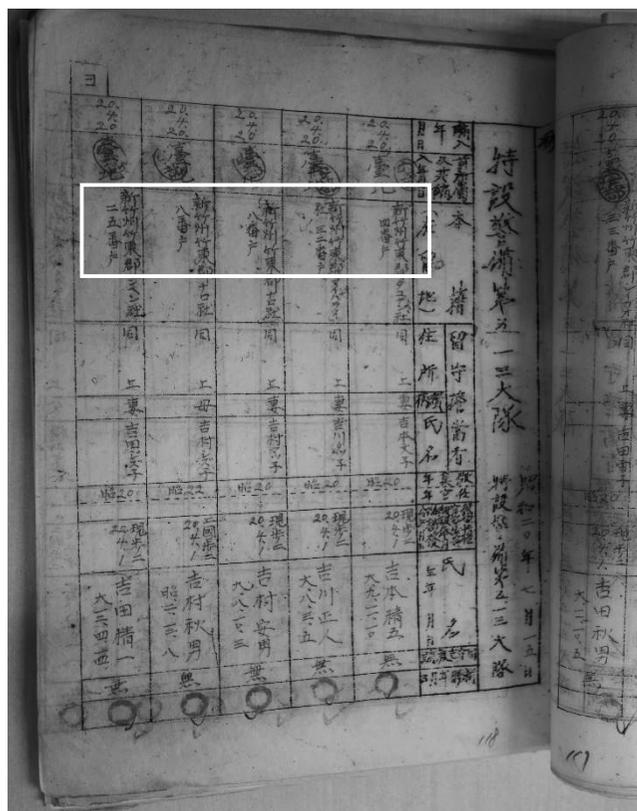
【図3『特設警備部隊第513大隊 台湾第13887部隊 留守名簿』】



（『特設警備部隊第513大隊 台湾第13887部隊 留守名簿』、国立公文書館にて筆者撮影）

まず、そこに記載された人々の本籍（図4）より、第513大隊が「新竹州」の部隊であることが分かる。

【図4『特設警備部隊第513大隊 台湾第13887部隊 留守名簿』】



（『特設警備部隊第513大隊 台湾第13887部隊 留守名簿』、国立公文書館にて筆者撮影）

『留守名簿』に記載されている情報を電子化すると、部隊の全体数などが判明する。第513大隊の全体数は620名である。うち日本人は87名であり、その他533名は高砂族であると考えられる。図5より、日本人であれば、本籍は県名(図5では、「富山県」)、高砂族であれば、部落名(図5では、「新竹州竹東郡ピーライ社」など)が記載されている。

【図5『特設警備部隊第513大隊 台湾第13887部隊 留守名簿』】

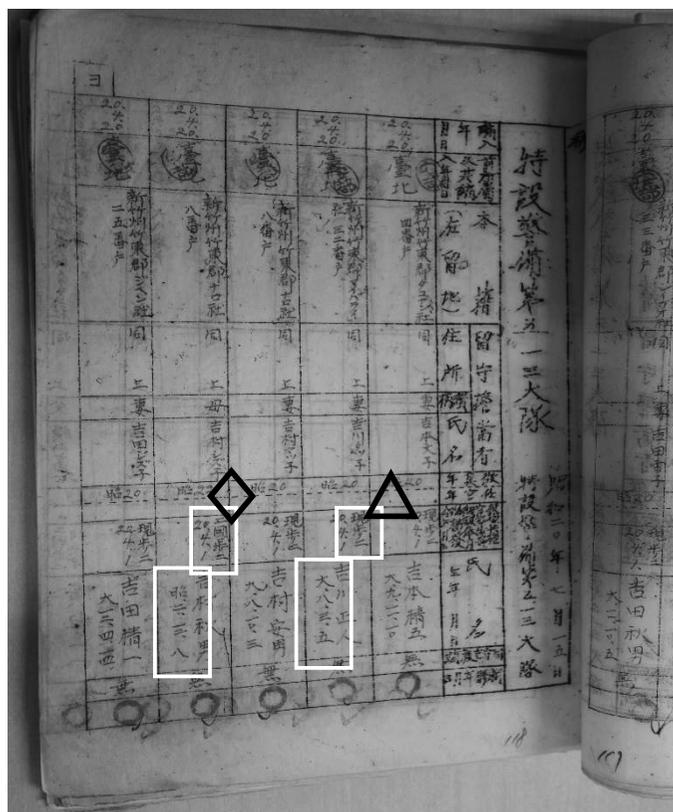
(『特設警備部隊第513大隊 台湾第13887部隊 留守名簿』、国立公文書館にて筆者撮影)

高砂族であると考えられる人々の本籍を確認した結果、その大部分は新竹州大溪郡、新竹州竹東郡、新竹州竹南郡、新竹州大湖郡に蕃社の名前が続くものとなっていた。大溪郡と大湖郡はタイヤル族、竹東郡と竹南郡はタイヤル族とサイシャット族の居住地であるので、第513大隊に集められた人々もタイヤル族及びサイシャット族である¹¹。

この部隊に集められた人々の年齢は差が広く、明治後半生まれから昭和前半生まれ(1904年～1931年)の者がいた。年齢にして14歳～40歳を過ぎた者である。

11 1936年『高砂族調査書』(台湾総督府警務局理蕃課)

【図6『特設警備部隊第513大隊 台湾第13887部隊 留守名簿』】



(『特設警備部隊第513大隊
台湾第13887部隊 留守名簿』、
国立公文書館にて筆者撮影)

続いて、図6に記載された、第513大隊に集められた高砂族の役種を参照すると、その召集についても一定の年齢基準があったと考えられる。1924年(大正13年)以前に生まれた人々は「現歩二(現役歩兵二等兵)」として、集められ、1925年以降(大正14年)に生まれた人々は「二國歩二(第二国民兵役歩兵二等兵)」として集められた。図6△では、大正8年(1919年、当時26歳)が生年月日の者は「現歩二」となっており、◇では、昭和2年(1927年、当時18歳)が生年月日の者は「二國歩二」となっている。その召集年は、日本人87名を除いて「1945年4月1日」であったため、20歳を基準としてその役種が決められたと考えられる。以下、表1は人数の内訳である。

表1 役種内訳	人数	
現歩二	309名	合計は536名となる。うち6名は日本人であり、高砂族のうち3名は記載なしであったため、高砂族533名の人数と一致する。
二國歩二	227名	

(筆者作成)

次に第513大隊の日本人に関しては、その前所属や本籍、役種などから日本人であることを判断した。日本人の本籍に関しては、以下、表2で整理した。

熊本県	3人	島根県	4人
岐阜県	1人	静岡県	2人
石川県	18人	富山県	18人
山口県	1人	長野県	13人
東京	3人	福岡県	1人
鹿児島県	2人	奈良県	1人
秋田県	1人	広島県	4人
兵庫県	2人	山形県	1人
青森県	1人	佐賀県	1人
沖縄県	2人	大分県	1人
滋賀県	1人	和歌山県	1人
岡山県	2人	長崎県	1人
宮崎県	1人		

(『留守名簿』より筆者作成)

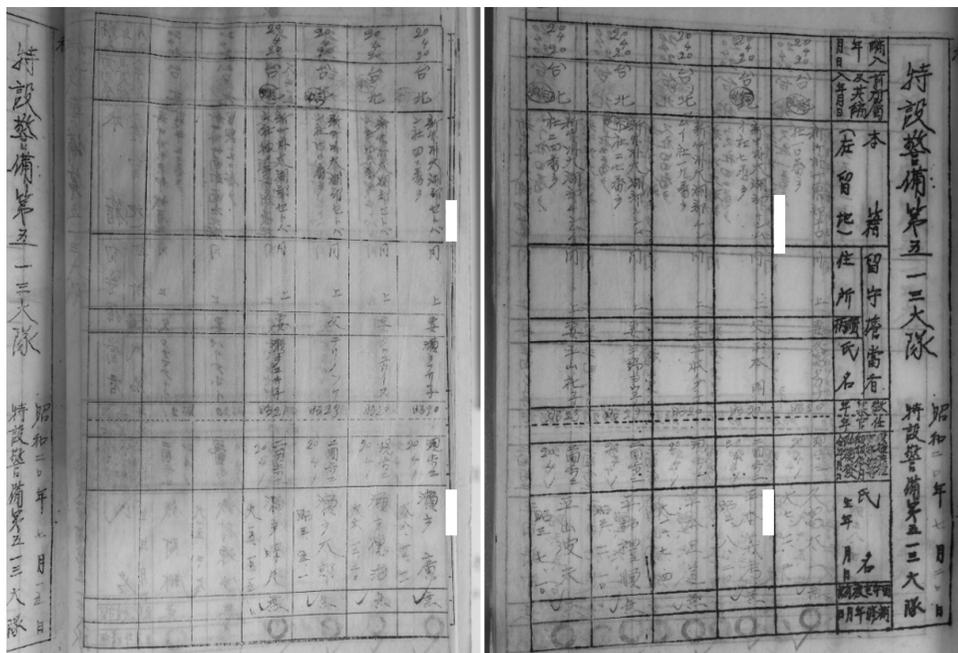
日本人に関しては、6名の現役歩兵二等兵を除いて、第513大隊の中では比較的、高位の存在であった。多くが、新竹州を統括していた第9師団の所属部隊である歩兵第7連隊、歩兵第35連隊、歩兵第19連隊より第513大隊編成時に転属している。そして87名のほとんどが、1945年9月3日に第9師団、第9師団の隷下部隊への転属もしくは召集解除となっている。第9師団は、アメリカ軍の台湾上陸が本命視され、沖縄から台湾へと転用された部隊であるが、元は石川県金沢で編成された部隊であり、第513大隊へと転属した兵士も北陸出身者が多い。

以上より、第513大隊が新竹州のタイヤル族及びサイシャット族そして第9師団より転属した日本人らで編成されていたことが判明した。彼らの任務などに関しては、記載がないため実態は不明であるが、これまでの「学徒」に関する研究からある程度の推察が可能である。彼らは、アメリカ軍の台湾上陸が予想された中、召集と編成が進められた。その後、アメリカ軍は台湾を通り越し、硫黄島そして沖縄へと上陸したものの、台湾への上陸の可能性は捨てきれず、台湾島内の防衛を担うために訓練などを進めた。

12 本籍が日本内地となっていた者である。ただし、一部、本籍と在留地が、福岡県（台北州）、鹿児島県（台中州）と記載されている者もいる。

本論の補足(『留守名簿』から判明した内容)として彼らの改姓名にも注目をしたい。例えば、大湖郡セトバン社出身であれば「瀬戸」、新竹郡錦山出身であれば「竹」より始まる苗字、竹東郡タバホ社出身であれば、「田」より始まる苗字、大湖郡チンムイ社であれば「平」より始まる苗字など、一定の基準をもって改姓名がつけられたことが分かる(下記、図7及び表3)。これは、近藤(1996)¹³の第4章先住民に対する「皇民化」政策の箇所では指摘されたパイワン族の改姓名の事例と同様のタイヤル族及びサイシャット族の結果であると言える。

【図7『特設警備部隊第513大隊 台湾第13887部隊 留守名簿』】



(『特設警備部隊第513大隊 台湾第13887部隊 留守名簿』、国立公文書館にて筆者撮影。左：セトバン社、瀬戸の事例、右：チンムイ社、「平」の事例)

新竹州大湖郡セトバン社	瀬戸武夫 S3.6.25
新竹州大湖郡セトバン社	瀬戸好男 S2.4.2
新竹州大湖郡セトバン社	瀬戸廣 T8.12.11
新竹州大湖郡セトバン社	瀬戸徳治 T6.12.10
新竹州大湖郡セトバン社	瀬戸太郎 S3.5.1
新竹州竹東郡タバホ社	田中幸二 S2.9.27
新竹州竹東郡タバホ社	田村和夫 S2.4.30
新竹州竹東郡タバホ社	田口保 S3.4.9
新竹州竹東郡タバホ社	田村太郎 S3.10.30

13 近藤正巳「総力戦と台湾-日本植民地崩壊の研究」(刀水書房、1996年) 325-343頁。

14 T:大正、S:昭和と表記している。○は、名簿から漢字が読み取れなかった箇所である。

新竹州大湖郡チンムイ社	平本義〇 S3.8.20
新竹州大湖郡チンムイ社	平本正道 T12.7.4
新竹州大湖郡チンムイ社	平野禮順 S3.2.10
新竹州大湖郡チンムイ社	平山波夫 S3.7.10
新竹州大湖郡チンムイ社	平田詩郎 S3.5.10
新竹州大湖郡チンムイ社	平田初〇 S3.6.1

(『留守名簿』より筆者作成)

おわりに

本研究は、筆者がこれまでに進めてきた特設警備部隊、『留守名簿』の研究の中で新たに発掘した「高砂特設警備部隊」の『留守名簿』の初歩的な分析から、その存在を明らかにするものである。既存の研究では、台湾原住民の太平洋戦争に関して高砂義勇隊を中心に進められていたため、大戦下における動員の全貌を捉えているとは言えない。

これまでの研究の中で、学徒特設警備部隊と同様に、まとまった単位で特設警備部隊に動員された「高砂特設警備部隊」の存在を確認している。高砂特設警備部隊は、6大隊編成されている。それらのうちの5大隊は、特設警備第513、514、515、516、517大隊が該当すると、『留守名簿』に記載された在留地住所や姓名などから推察される¹⁵。

本論では、いち早く公開された第513大隊の『留守名簿』を分析した。第513大隊の名簿分析から、第513大隊は、『第10方面軍関係戦史資料』で示された高砂特設警備部隊第2大隊の可能性が限りなく高いと考えるが、高砂特設警備部隊第2大隊から第513大隊へと改編したことを示す資料はこれまでに発見できていない。

本特設警備部隊は、『留守名簿』から判明しているだけでも5部隊は編成されており、『第10方面軍関係戦史資料』の高砂特設警備部隊であれば6部隊編成されていたということになる。1部隊の人数は部隊ごとに異なるが、第513大隊は600人を超える部隊であり、同様の部隊が6個編成されていた場合、そこには3000人ほどの高砂族が召集されていた可能性がある。その人数は、高砂義勇隊にも匹敵するものであることについて強調しておきたい。

筆者は、軍事史のアプローチの中で、高砂族が集中的に集められた名簿を発掘し、本報告を進めるに至った。本論では、学術資料、史料解読であり、既存の原住民研究との結び付け、具体的な蕃社ごとの整理と戸籍史料などとの結び付けまで研究が及んでいないため、今後上記について実施する余地がある。

本論の内容について深く追究し、台湾島内に残った高砂族と戦争との関係を明らかにすることは、台湾の歴史認識に新たな視座を開くこととなるだろう。

15 『第10方面軍関係戦史資料』(防衛省防衛研究所)。

参考文献

- アジア歴史グロッサリー <http://www.jacar.go.jp/glossary/term/0100-0040-0090-0010-0010.html>
2016年7月16日 閲覧。
- 小野純子「嘉義農林学校学生の戦争体験」（『人間文化研究』28号、名古屋市立大学人間文化研究科、2017年）
- 小野純子「嘉義農林学校学生の戦争体験2」（『人間文化研究』29号、名古屋市立大学人間文化研究科、2018年）
- 小野純子「大戦末期の台湾における「学徒」動員—特設警備第511大隊台湾第13871部隊の『留守名簿』の分析」（『軍事史学』第55号、2019年）
- 菊池一隆「台湾原住民から見るアジア・太平洋戦争—高砂義勇隊の実態と歴史的的位置—」（『現代中国研究』第33号、2013年、特集：日中戦争における東アジア）
- 菊池一隆『日本軍ゲリラ高砂義勇隊 台湾原住民の太平洋戦争』（平凡社、2018年）
- 近藤正巳「総力戦と台湾—日本植民地崩壊の研究」（刀水書房、1996年）
- 『高砂族調査書』（台湾総督府警務局理蕃課、1936年）
- 『第10方面軍関係戦史資料』（防衛省防衛研究所）
- 『特設警備部隊第513大隊 台湾第13887部隊 留守名簿』
- 中生勝美『近代日本の人類学史 帝国と植民地の記憶』（風響社、2016年）